

変容する学び (Transformative Learning) とホールスクールアプローチ

サステナビリティ円卓会議

2018年8月23日 (木) 15:30-17:30

地球環境パートナーシッププラザ

(公財) ユネスコ・アジア文化センター
プログラム・スペシャリスト
若山 洋子

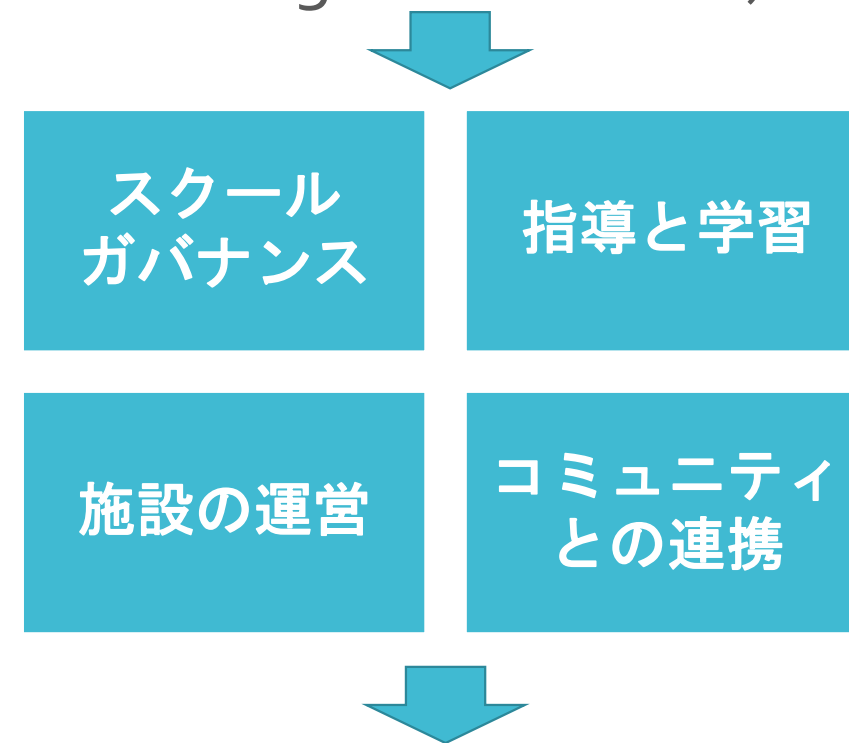
目次

1. GAPパートナーネットワーク₂のご紹介
2. WIS/WSA実践事例
 - UNESCO ASPnetフラッグシッププロジェクト
Whole-Institution Approach to Climate Change
 - サステイナブルスクール
3. Post-GAPへ向けて（PN₂の活動）

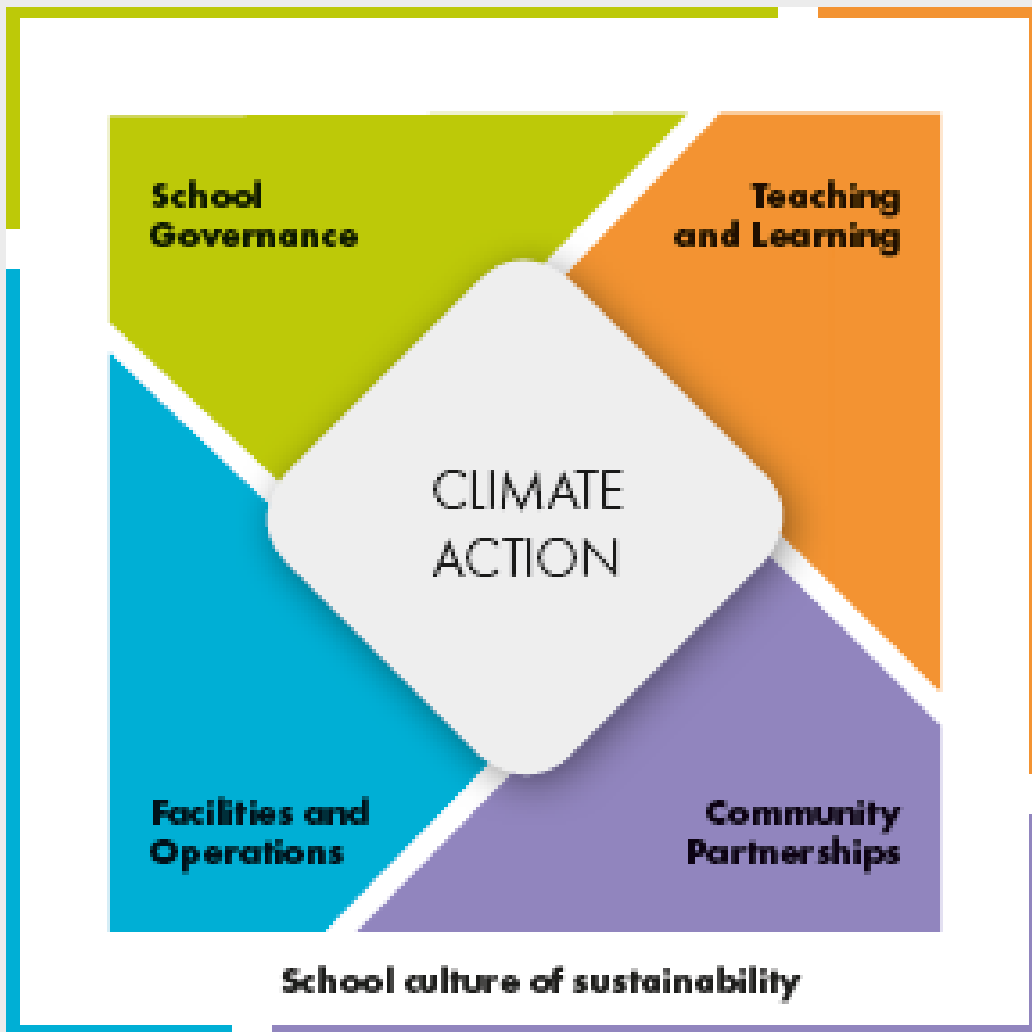
1. GAP-PN₂のご 紹介

- 教育機関、NGO、自治体、ネットワーク、
ユネスコ国内委員会など21団体
- PN₂の目指すもの
Transforming learning and training environments
(UNESCO Roadmap for implementing GAP on ESD)
= Integrating sustainability practices into education
and training environments
機関包括型アプローチ（ESDへの包括的取組）
(ESD国内実施計画)

- 学びの起こる環境そのものを変容させる (Transforming learning and training environment)



- 変容を誘発する学びの実現 Transformative learning



PN₂のこれまでの活動

2015-2016

- Whole-School/Institution Approach to ESD –A Backgrounderの作成
- 「校種や公私、その他のコンテクストによって、WSA/WIAのフレームワークは異なるが、類似点を洗い出すことである程度のモデルを作成することは可能」

2016-2017

- Backgrounderに基づく意見交換を重ね、WSA/WIAに関する理解を深める
- WSA/WIAを軸に各団体が活動を展開
- 調査票の作成と中間調査の実施（2017）

2. WIA/WSA実践 事例

① UNESCO ASPnet Project on Whole-Institution Approach to Climate Change

気候変動をテーマとした機関包括型アプローチ実践
パイロットプロジェクト2016-2018

- 2016年9月 ユネスコ本部主導のフラッグシッププロジェクトとして始動（学校レベルの活動は2018年3月まで）
- ACCUがプロジェクト・コーディネーター（日本）を務める
- 世界26ヶ国258のユネスコスクールで実施
- 「気候変動対策に学校全体（Whole-School Approach）で取り組むことで、Climate-friendlyな教育機関の在り方を目指す」
- 2018年3月までに、生徒230,980名、教職員13,853名がプロジェクトに参加

2016-2018の成果

スクール
ガバナンス

指導と学習

施設の運営

コミュニティ
との連携

- 89の学校で気候変動を意識したスクールビジョンが新規に作成された
- 99の学校が既存のスクールビジョンを気候変動を意識したものに改訂した
- 143の学校で気候変動チームが編成された

スクール
ガバナンス

指導と学習

施設の運営

コミュニティ
との連携

- 15の学校(全体の71.4%)が「指導と学習」の領域における進展が目覚ましかったと報告

スクール
ガバナンス

指導と学習

施設の運営

コミュニティ
との連携

スクール
ガバナンス

指導と学習

施設の運営

コミュニティ
との連携

- 大多数の学校が、施設環境や設備運営を「climate-friendly」になるよう見直した

(例 グリーンスクール、排水の有効利用、エネルギー消費量の記録、再生可能エネルギーへの活用)

※自治体との協力体制の構築が鍵

- 173の学校が一つ以上の地域の団体と協力体制を築いた
- 団体種別で見ると...
 - 近隣の協会や組合 (118)
 - 自治体 (108)
 - 他の学校や地元の環境団体 (99)
 - メディア (80)
 - 地元企業 (78)
 - 地域の高等教育・研究機関 (51)
 - 地域のコミュニティセンター (41)
 - 国内外のネットワーク (65)

広島県立安古市高等学校

教職員が省エネ活動を始め、校内に電力消費量の掲示を開始

- エアコンの設定温度を調整
- クラブ活動休止日と職員の定時帰宅日を設置（週一日）



生徒が自主的に活動に加わる

電気代が節約できたことで、教材の追加購入が可能に

生徒会が電力消費量のデータ分析を自発的に行い（省エネ活動前と後を比較）、全校生徒へ向けて発信

一部生徒が自主学習テーマとして気候変動を扱い、スタディーグループをリード

地域住民や近隣の学校を招いてポスターセッションで発表



Case Study:
From *facilities and operations* to
learning

考察：「指導と学習」領域の活動を事例に 領域間の相互作用がWSAの効果を高める

「指導と学習」領域での活動が、ホールスクールアプローチの他の領域にどう関係してくるのか。

- UNESCOが奨励するように、気候変動を全ての教科で取り扱うところまで持っていくにはそれなりのチャレンジが伴うが、「指導と学習」の領域でアクションを起こすこと自体は、それほど困難ではない。
 - * 一方で、小学校低学年向けの気候変動に関する教材は、高学年や中等教育レベルに比べ非常に少ないことが課題としては浮き彫りに。
- 重要なのは、学びが教室内外のアクションに繋がっていること。
- 言い換えれば、学校あるいはコミュニティがその物理的空間を学びの内容を実践に移す「実験室」として機能を果たす準備があるかどうか。
- 結果、自然とより深い学び、「変容」が可能になるのでは。

② サステイナブルスクール事業 2016-2018

- 2016年に「ESD重点校形成事業」として始動
- 公募により24の教育機関が選定され3年間の活動をスタート
 - 私立5校、公立19校
 - シュタイナー学校 3校
 - NPO運営による教育機関4校
 - 特別支援学校 2校
- 特徴あるESD実践校としてそれぞれに自立した活動を行うだけでなく、ホールスクールアプローチで取り組むことで、周辺校、地域、家庭を先導してESDの深化に寄与することを目指す。

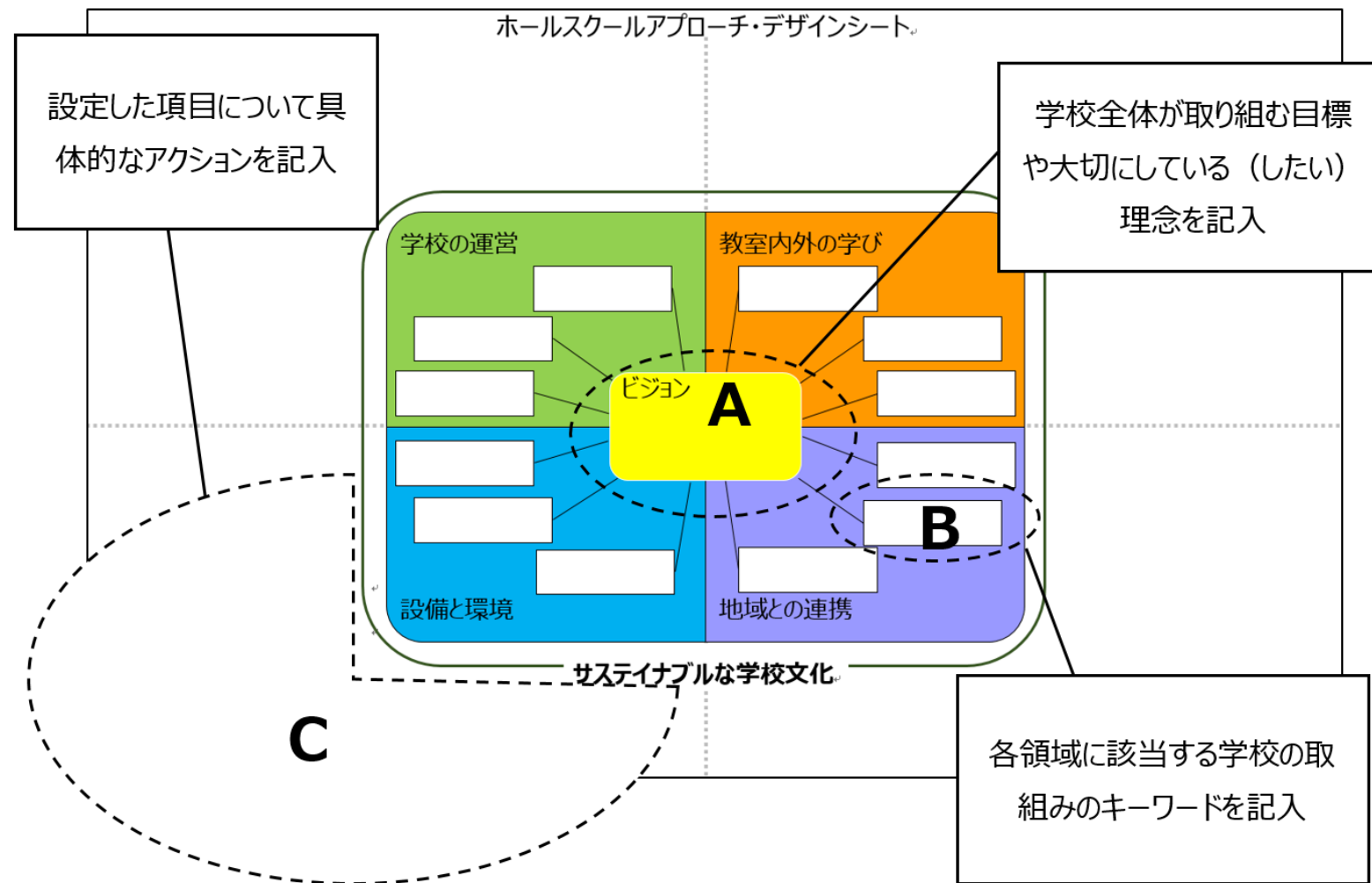


ESD Whole-School Approach

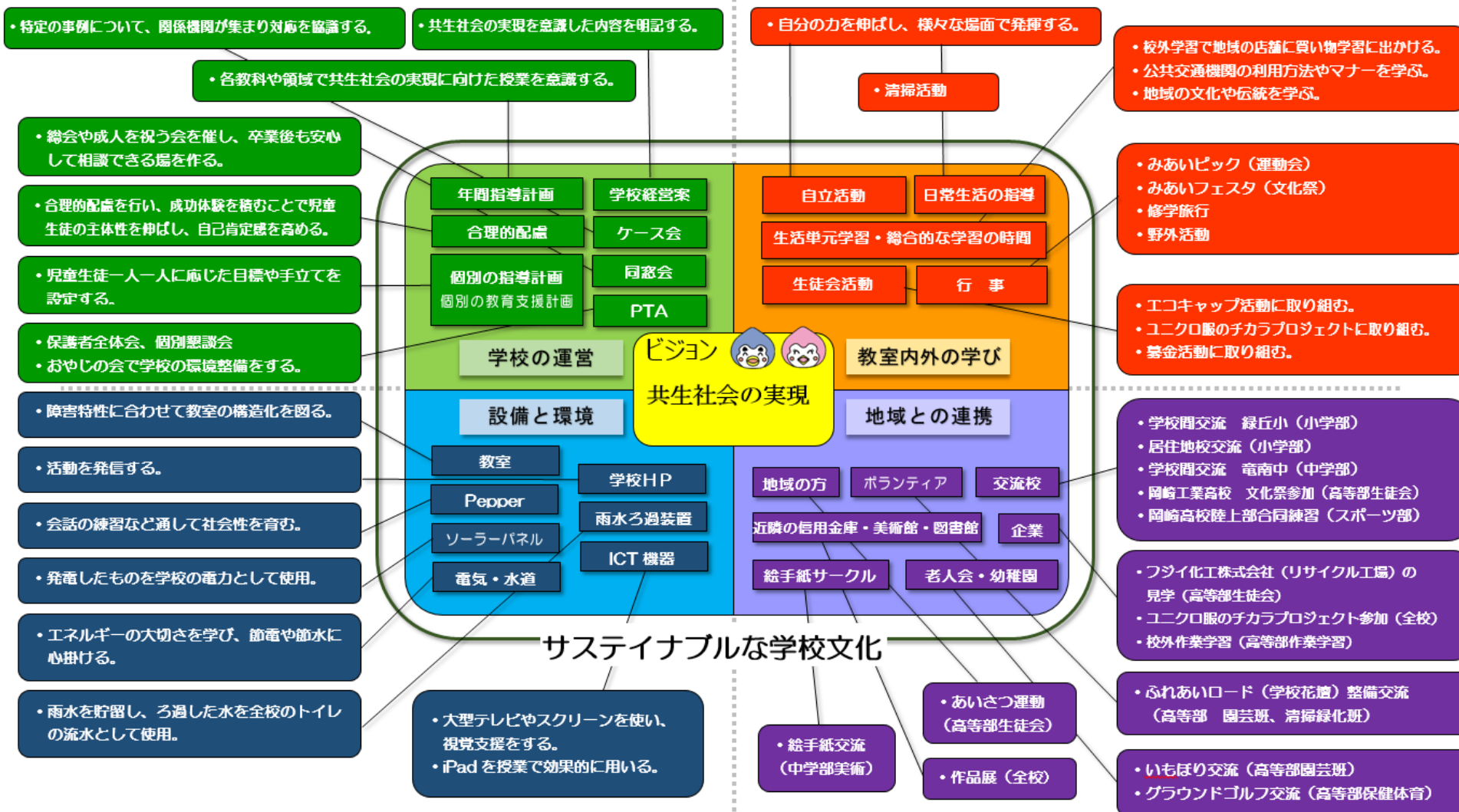
 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

領域間の相互作用がWSAの効果をも高める

愛知県立みあい
特別支援学校



ホールスクールアプローチ・デザインシート



3. Post-GAPへ向 けて (PN₂の活動)

PN₂としての今後の計画

2018-

- 2017年に実施した調査を、対象をPN₁₋₅全体に拡大して実施
- 各団体が蓄積してきたWIA/WSA実践の普及をはかる → 資料の作成

- ① **PN₂ PowToon Video** : 様々な団体で使われているWIA/WSAの定義や概念図を紹介する動画の作成
- ② **PN₂ Policy brief** : WIS/WSAに取り掛かろうとする教育機関、団体向けに、背景やガイドラインをまとめた文書の作成

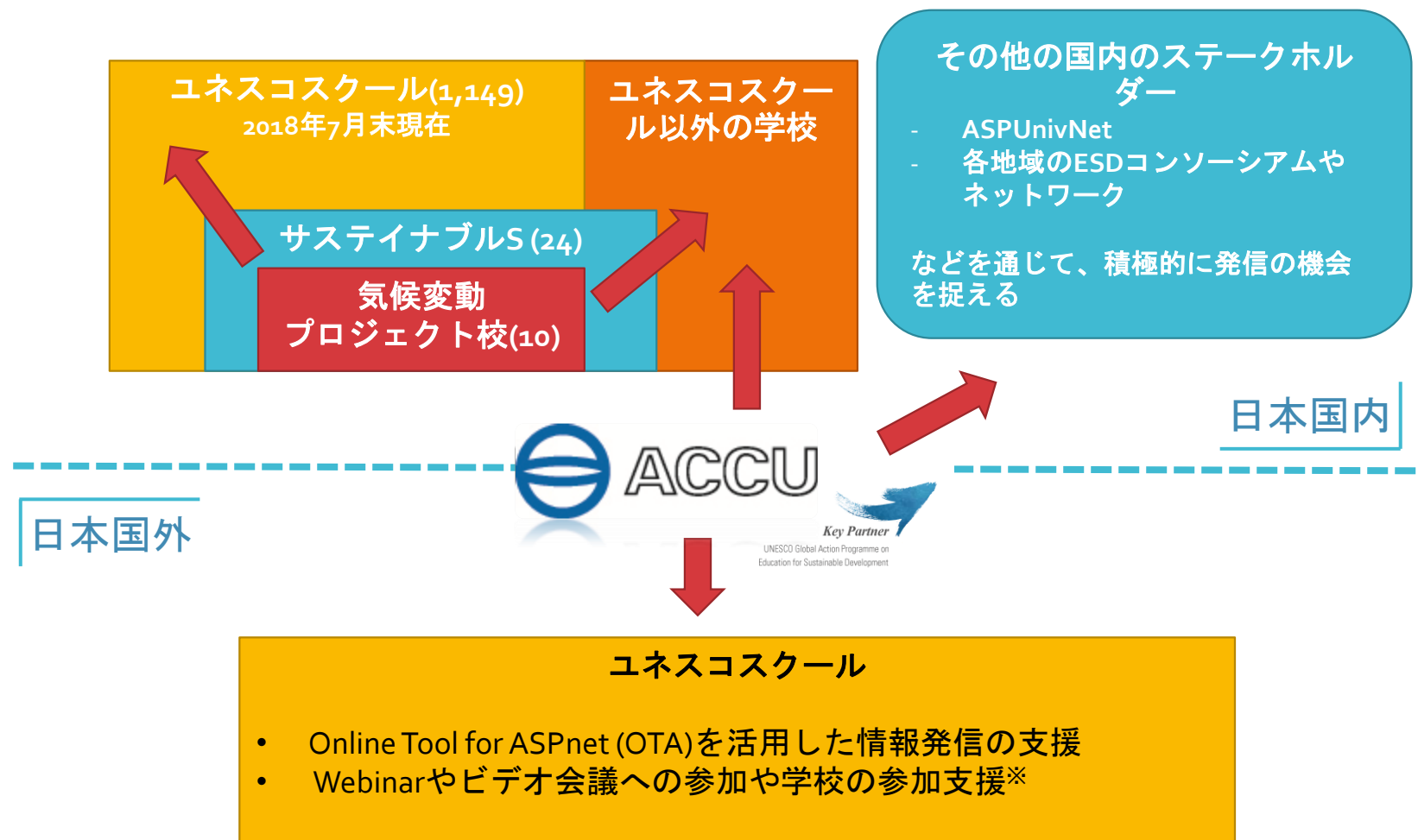


Scaling-up WIA/WSA

その他の討議内容

- 高等教育機関におけるWIA/WSAの経験の蓄積をどのように測り、どのように可視化してくかが課題。具体的には、高等教育機関の実状が反映されやすいよう、中間評価のフォーマットに改善が必要なのでは。
- TVET関係者からも同様の指摘があり。
- また、現在のPN₂では、公教育分野での活動が中心で、NFEセクターのインプットが不足している。ESDにセクターの垣根はないが、それゆえに、PN₂として提案（紹介）するコンセプトが偏ってはいはならない。
- ESDやSDGsに関する既存のオンラインリソースも積極的に活用していく必要があるのでは。（EdX、Coursera、James Cook Universityなどの高等教育機関が提供するMOOC（massive open online courses）教材、SDG Academyなど）

ACCUとして：今後の展望



※2018年度実績： UNESCO Webinar 発表1回
(8月現在) 日本の参加校によるビデオ会議参加4回

ありがとうございました。

